

日本看護研究学会雑誌掲載論文の分析

Analysis of Published Papers in Journal of Japan Society of Nursing Research

田 中 裕 二¹⁾ 石 井 ト ク²⁾ 江 守 陽 子³⁾ 尾 岸 恵三子⁴⁾
Yuji L. Tanaka Toku Ishii Yoko Emori Emiko Ogishi

中 野 正 孝⁵⁾ 松 田 たみ子⁶⁾ 三 木 明 子³⁾
Masataka Nakano Tamiko Matsuda Akiko Miki

(学会誌発行30周年記念事業実行委員会)

キーワード：原著論文，看護大学，看護研究，研究領域，研究デザイン

Key Words：original article, nursing university, nursing research, research field, research design

今日、看護師養成教育は大学教育に移行しつつあり、看護系大学は180校を超えている。それとともに研究成果を公表する場である看護系学会の数も増加してきている。その中でも本学会の設立は早く、その発端は1974年（昭和49年）10月にさかのぼる。当時、4国立大学（熊本大学、徳島大学、弘前大学、千葉大学）の教育学部に高等学校衛生看護科の教員を養成する特別教科（看護）教員養成課程が設置（熊本大学：1966年（昭和41年）設置、徳島大学：1967年（昭和42年）設置、弘前大学：1968年（昭和43年）設置、千葉大学：1969年（昭和44年）設置）されており、その現職教員の研究協議会がこの4大学の持ち回りで毎年定期的に開催されていた。そして、1974年10月に千葉大学で開催された第5回四大学研究協議会で、看護学確立のための看護学会設立の必要性が討議され、研究会準備委員会が発足した。1975年（昭和50年）9月の第6回四大学研究協議会は徳島大学が主催し、同時に第1回四大学看護学研究会が徳島大学で開催された。翌1976年（昭和51年）9月には第2回四大学看護学研究会が弘前大学で開催された。研究会開催とともに、その研究内容を公表する雑誌（学会誌）が1978年（昭和53年）3月に、「四大学看護学研究会雑誌」として創刊された。1981年（昭和56年）9月28日の第7回四大学看護学研究会総会（熊本で開催）で、日本看護研究学会と名称が変更され、それに伴い、4巻2号（1981年10月20日発行）から学会誌名が「日本看護研究学会雑誌」と変更された^{1), 2)}。そして、2007年（平成19年）には学会誌発行30周年を迎えた。2008年に発刊された日本

看護研究学会雑誌発行30周年記念誌は、これまでに発刊された学会誌や編集委員会および学術集会の足跡を振り返ることで、本学会の学術的な蓄積を明らかにすることを目的として企画された³⁾。その中で、過去29年間（1978年度～2006年度）に本学会誌に掲載された論文の分析結果の概略を紹介し、本学会の特徴や30年間の研究内容の推移について記述したが、ここでは詳細な分析結果を報告するとともに今後の看護学研究的展望について考える。

1. 方 法

1. 分析対象論文

分析に用いた学会誌数は、本学会誌の前身である「四大学看護学研究会雑誌」1巻1号（1978年3月）～4巻1号（1981年6月）の8冊および現在の名称に変更された「日本看護研究学会雑誌」4巻2号（1981年10月）～29巻5号（2006年12月）までの92冊の合計100冊とし、これらの学会誌に投稿された原著論文364編を分析対象とした。

2. 分析方法

分析に際しては、学会誌に掲載された原著論文のタイトルおよび要旨から研究領域および研究デザインを判断した。また、研究領域別原著論文数の推移をみるために、本分析では1巻～5巻を第1期（発行年月：1978年3月～1983年3月）、6巻～10巻を第2期（1983年4月～1988年3月）、11巻～15巻を第3期（1988年6月～1992年12月）、16巻～20巻を第4期（1993年3月～1997年12月）、21巻～25巻を第5期（1998年3月～2002年12月）、残り26巻～29

1) 千葉大学大学院看護学研究科 Chiba University Graduate School of Nursing

2) 元日本赤十字北海道看護大学 Former the Japanese Red Cross Hokkaido College of Nursing

3) 筑波大学大学院人間総合科学研究科 Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba

4) 日本赤十字秋田看護大学 The Japanese Red Cross Akita College of Nursing

5) 三重大学医学部看護学科 School of Nursing, Faculty of Medicine, Mie University

6) 茨城県立医療大学保健医療学部看護学科 Ibaraki Prefectural University of Health Sciences

巻の4年間を第6期（2003年4月～2006年12月）とした。

3. 研究領域

掲載された論文を分類するために研究領域を15に分け、この研究領域にあてはまらないものは「その他」に分類した。15領域は次のとおりである。

- ① 看護理論 ② 看護管理 ③ 看護技術
- ④ 看護教育 ⑤ 看護倫理 ⑥ 精神保健看護
- ⑦ 母性・周産期看護 ⑧ 家族看護
- ⑨ 小児看護 ⑩ 急性期看護・クリティカルケア
- ⑪ 慢性期看護・リハビリテーション看護
- ⑫ 緩和ケア・ホスピスケア・がん看護
- ⑬ 高齢者看護 ⑭ 地域看護・在宅看護
- ⑮ 感染看護 ⑯ その他

4. 研究デザイン

研究デザインは、①質、②量、③実験・準実験、④混合、⑤その他、の5つに分類し、研究デザインを明確に分類できないものは「不明」とした。実験・準実験研究は量研究に含まず、別に分類した⁴⁾。また混合は、質研究と量研究の2つのデザインを含むものとした。

実験研究および準実験研究については下記のように定義した。

実験研究：現象にかかわる多くの要因の中から、いくつかの要因だけを選び出して、それ以外の要因は同じ状態に保つようにコントロールした状態で、選び出した要因間の関係性を検証していく研究
 準実験研究：実験操作を行うが、実験に伴う統制群の設定や無作為化などは強く規定しないで行う研究

II. 結 果

1. 研究領域別原著論文数

最も多かった研究領域は「看護技術」の71編で、以下、「看護教育」(57編)、「慢性期看護・リハビリテーション看護」(32編)、「地域看護・在宅看護」(31編)、「精神保健看護」(24編)であり、この5領域で全体の59.1%を占めた(表1)。

2. 5年ごとの研究領域別原著論文数の推移

学会誌は年度によって、1号と2号、または、3号と4号を合併号として発行した年度があったため、分析した学会誌数は第1期：13冊、第2期：12冊、第3期：19冊、第4期：19冊、第5期：20冊、第6期（4年間）は16冊の合計100冊であった。

第1期の掲載論文数は52編であった(表2)。領域別では「看護技術」と「看護教育」がそれぞれ8編で、続いて「小児看護」および「感染看護」がそれぞれ5編であった。この4領域の掲載論文数は26編で、全体の半数を占めていた。

第2期の掲載論文数は70編で、「看護技術」18編、「感染

表1 研究領域別原著論文数

看護理論	8	小児看護	13
看護管理	22	急性期・クリティカルケア	7
看護技術	71	慢性期看護・リハビリテーション看護	32
看護教育	57	緩和ケア・ホスピスケア・がん看護	15
看護倫理	3	高齢者看護	16
精神保健看護	24	地域看護・在宅看護	31
母性・周産期看護	15	感染看護	22
家族看護	6	その他	22

表2 5年ごとの研究領域別原著論文数の推移

研究領域 \ 年	1978－1982	1983－1987	1988－1992	1993－1997	1998－2002	2003－2006	合計
看護理論	4	4	0	0	0	0	8
看護管理	0	2	6	3	7	4	22
看護技術	8	18	22	8	8	7	71
看護教育	8	4	9	17	12	7	57
看護倫理	0	0	1	0	0	2	3
精神保健看護	2	0	2	4	8	8	24
母性・周産期看護	4	5	3	1	2	0	15
家族看護	0	2	0	0	3	1	6
小児看護	5	3	1	1	2	1	13
急性期・クリティカルケア	2	2	2	0	1	0	7
慢性期看護・リハビリテーション看護	3	4	5	3	11	6	32
緩和ケア・ホスピスケア・がん看護	4	0	5	2	0	4	15
高齢者看護	3	4	2	1	4	2	16
地域看護・在宅看護	2	7	5	8	6	3	31
感染看護	5	9	0	2	4	2	22
その他	2	6	3	4	4	3	22
合 計	52	70	66	54	72	50	364

看護」9編,「地域看護・在宅看護」7編であった。この3領域の掲載論文数は34編で、全体の約半数を占めた。

第3期は66編で,「看護技術」22編,「看護教育」9編,「看護管理」6編であった。この5年間では,「看護技術」に関する論文が全体の1/3を占めた。

第4期は54編で、第3期の5年間と比較して12編減少していた。領域別では,「看護教育」が17編と増加し,「看護技術」および「地域看護・在宅看護」がそれぞれ8編であった。この3領域の掲載論文数は33編で、全体の掲載論文数の6割を占めた。

第5期の掲載論文数は72編で、第4期の5年間と比較して18編増加した。領域別では,「看護教育」12編,「慢性期看護・リハビリテーション看護」11編,「看護技術」および「精神保健看護」が各々8編で、この4領域の掲載論文数は39編であった。

第6期はこれまでの結果とは異なり、領域間に投稿数の差がなく,「精神保健看護」8編,「看護技術」と「看護教育」7編,「慢性期看護・リハビリテーション看護」6編であった。また、この4領域の掲載論文数は28編で、過半数を占めていた。

3. 研究デザインによる分類

量的研究は192編(52.7%), 実験・準実験研究は118編(32.4%)であり、この両者を合わせると全体の約85%

を占めていた(表3)。また、質的研究は39編で、全体の10.7%であった。

4. 5年ごとの研究デザイン別論文数の推移

各期における研究デザイン別の論文数とその割合については表4、図1のとおりである。

量的研究は第1期から第4期までは20編(38.5%), 28編(40.0%), 38編(57.6%), 37編(68.5%)と増加し、第4期では全掲載論文数の約7割を占めていた。しかし、その後は第5期45編(62.5%), 第6期24編(48.0%)に減少した。

実験・準実験研究は、第1期13編(25.0%)であったが、第2期30編(42.9%), その後は27編(40.9%), 16編(29.6%), 18編(25.0%)と徐々に減少傾向を示し、第6期では14編(28.0%)とわずかに増加した。

質的研究は、第1期は11編(21.2%)であったが、第2期では9編(12.9%)に減少し、第3期では0%であった。その後、第4期では1編(1.9%), 第5期では7編(9.7%), 第6期では11編(22.0%)となった。

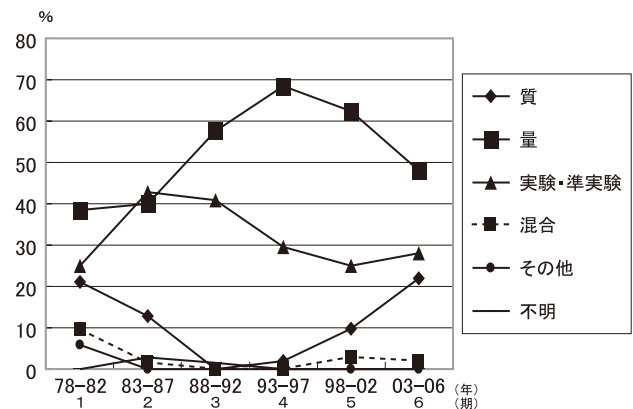


図1 5年ごとの研究デザイン別論文割合の推移

表4 5年ごとの研究デザイン別原著論文数の推移

種類 \ 年	第1期	第2期	第3期	第4期	第5期	第6期	合計
	1978-1982	1983-1987	1988-1992	1993-1997	1998-2002	2003-2006	
量	20 (38.5)	28 (40.0)	38 (57.6)	37 (68.5)	45 (62.5)	24 (48.0)	192 (52.7)
実験・準実験	13 (25.0)	30 (42.9)	27 (40.9)	16 (29.6)	18 (25.0)	14 (28.0)	118 (32.4)
質	11 (21.2)	9 (12.9)	0 (0)	1 (1.9)	7 (9.7)	11 (22.0)	39 (10.7)
混合	5 (9.6)	1 (1.4)	0 (0)	0 (0)	2 (2.8)	1 (2.0)	9 (2.5)
その他	3 (5.7)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	3 (0.85)
不明	0 (0)	2 (2.8)	1 (0.5)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	3 (0.85)
合 計	52 (100)	70 (100)	66 (100)	54 (100)	72 (100)	50 (100)	364 (100)

(%)

Ⅲ. 考 察

看護研究の動向分析では、学術集会講演集の抄録内容の分析を行った研究^{4), 5)}も散見されるが、本研究は学会誌に掲載された原著論文のタイトルおよび要旨から研究領域および研究デザインを判断した。したがって、分析対象となった論文は、学会の主旨をよりよく反映していると考えることができる。以下、掲載論文の動向について考察する。

1. 原著論文数から見た研究領域

分析した364論文で最も多い研究領域は「看護技術」の71編で、次いで「看護教育」の57編であった。「看護技術」の論文数は全体の19.5%、「看護教育」は15.7%であった。看護技術に関する論文数が多いのは、本学会には看護の最も基本的な看護技術を研究対象とする教育者や研究者が多いことや、また、看護技術の評価を数値として示しやすいことが関係しているのではないと思われる。

次に多かった研究領域は「看護教育」であるが、この理由としては本学会員の多くは教育者であるため、看護学生や教員を対象にした研究が多くなったのではないと思われる。また、本学会の設立母体が四大学（弘前大学、千葉大学、徳島大学、熊本大学）の教育学部特別教科（看護）教員養成課程の先生方が主体になっていることも影響していると思われる。

毎年、10編～14編の論文が掲載されているのに第4期は原著論文が大きく12編も減少したのは、この時期に看護大学の急激な増加による教員の移動などによる時間的な制約が関係していたのではないと思われる。

2. 領域別論文数の動向

第4期では、分類された研究領域は「その他」を含めて12領域あり、その他の時期（第1期～第3期、第5期、第6期）では13領域に及んでいた。このことは、本学会誌には多くの研究領域からの投稿があり、看護学全般の総合的

な学術雑誌といえるのではないと思われる。研究領域を詳しく分析すると、「看護技術」と「看護教育」は全期間に渡って多くの論文掲載がみられた。これは、本学会員の多くが教員であることが関係しているのではないと思われる。

そのほかに、第1期、第2期では、「感染看護」や「地域看護・在宅看護」に関する論文が多くみられたが、第5期および第6期では、「慢性期看護・リハビリテーション看護」、「精神保健看護」や「看護管理」など違った研究領域からの掲載論文が増加していた。このことは、疾病構造の変化や関心領域の変化などによってその時期の特徴が示されていると思われる。

3. 研究デザイン別論文数の動向

掲載された364論文のうち質的研究は39編と少なく、量的研究が192編と多いことが本学会誌の特徴といえる。また、量的研究とは区別した「実験・準実験研究」を主体とした原著論文は118編あり、両者を合わせると310編となり、1期と6期以外は全体の80%以上の割合になっていた。このような量的な研究論文が多いことが他の学会誌に比べて本学会誌の大きな特色であろう。研究において、人に関する種々のデータを数値化して示すことは、多くの人が理解しやすい手法であることに加え、本学会員は看護職者と限定せず、学際領域の研究者や教育者、臨床実践者が多数加わっていることも関係していると思われる。

反対に、質的研究は少なく、これは量的研究や実験・準実験研究が多いことの裏返しによるものであるが、本学会員の研究手法が質的な研究ではないことを示している。本学会が看護系の総合的な学術団体を目指すのであれば、今後はもっと質的な研究の論文投稿が増加するような方策を考える必要があると思われる。

要 旨

本学会誌の1巻1号(1978年；昭和53年)から29巻5号(2006年；平成18年)に掲載された原著論文364編の内容分析を行った。掲載された原著論文の研究領域を分析すると、「看護技術」が全体の19.5%、「看護教育」が15.7%であり、5年毎に分析を行ってもすべての年代でこの2領域が上位を占めていた。この理由としては、本学会の会員には看護ケアに必要な看護技術を研究対象とする教育者や研究者が多いことや、本学会の設立母体が教育学部ということも関係していると思われる。

一方、研究デザイン別の論文数では、量的研究が192編、実験・準実験研究が118編と多いのに対して、質的研究は39編と少なかった。量的・実験的研究が主流であるとはいえ、研究領域が多岐に及んでいるところからも本学会誌は看護学全般の学術雑誌といえる。

文 献

- 1) 山元重光：第3回四大学看護学研究会記事－会長演説 看護研究について，日本看護研究学会雑誌，1(1)，3-6，1978.
- 2) 日本看護研究学会設立20周年記念事業－20年のあゆみ－，日本看護研究学会雑誌，18(1)，9-18，1995.
- 3) 学会雑誌発行30周年記念事業実行委員会：投稿論文の分析，日本看護研究学会雑誌発行30周年記念誌，38-42，2008.
- 4) 川口孝泰：看護研究ガイドマップ，医学書院，東京，2002.
- 5) 川口孝泰，田島桂子，他：看護学教育研究の動向，その1．「日本看護学教育学会」学術集会講演集の経年的分析から．日本看護学教育学会誌，15(3)，59-64，2006.

〔平成22年12月24日受 付〕
〔平成23年1月27日採用決定〕